



「もんじゅ」廃炉 核燃サイクル破たんは目に見えている

「もんじゅ」
ついに廃炉



政府は九月二十一日、原子力関係閣僚会議を開き、高速増殖原型炉「もんじゅ」（福井県）について、年末までに廃炉を含む抜本的な見直しをすることと合意しました。

今までに約一兆二千億円を投じながら二十年以上ほとんど運転していない「もんじゅ」、年間二百億円を無駄遣いし、トラブル続きの「もんじゅ」がついに廃炉に！なぜもっ

と早く決断できなかったのかという疑問が残ります。

危険極まりない

高速増殖炉



「もんじゅ」は高速増殖炉の原型炉です。その前の段階は実験炉の「常陽」です。「もんじゅ」が成功すれば、次は実証炉、実用炉という経過を経る予定でしたが、原型炉の段階で失敗し、以後二十年間一ワットの電気も生み出さずに来ました。

高速増殖炉は、ウラン・プルトニウム混合酸化物（MOX）燃料を使い、発電した以上の燃料（プルトニウム）を生成できると言われています。しかし冷却にナトリウムを使うので、事故や火災が起きた時、水で炉心を冷却したり消火することはできません。

ナトリウムは水に触れると、水素を発生し、大爆発を起こします。また、空気に触れれば急激に酸化し火災を起こします。漏れ出たナトリウムがコ

ンクリートと反応すれば水素が発生し、水素爆発を引き起こします。そのナトリウムは薄い配管の中を通っているのです。

実際、一九九五年にはナトリウム漏れ事故を起こし、あわや大惨事になるところでした。

それでも高速炉を

あきらめない政府

政府は「高速炉開発会議」を設置し、新たな「高速炉」開発の検討を進めるとしています。具

体的には、フランスが計画する新型高速炉「ASTRID（アストリッド）」の共同研究を軸にして、一代前の実験炉「常陽」（茨城県大洗町）の再稼働なども検討するとしています。

破たんは目に
見えている



原型炉とは、新型の原子炉を開発する途中の段階で、たとえば発電用であれば実際に発電ができるかどうかを確認するためのものです。性能や安全性の確認がおもに行なわれます。

実験炉はその型の炉建

設のためのデータを得るためもので、原型炉で失敗しているのに一つ手前の「常陽」を再稼働して成功するとは思えません。また、二〇〇七年から九年間も停止している「常陽」を動かすこと自体が危険です。

高速増殖炉に

こだわる理由は核武装

こうまでして、なぜ政府は高速増殖炉にこだわるのでしょうか？一つは、政府の本音がプルトニウムを保有し核兵器を製造することだからです。

核兵器に必要なプルト

ニウムは高速増殖炉によっ

てこそ得られます。

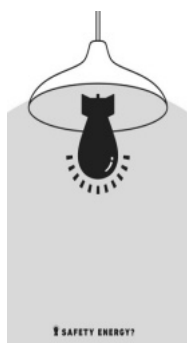
普通の原発が生み出すプルトニウムには核分裂性の高いプルトニウム239がプルトニウムの七〇％しか含まれませんが、高速増殖炉が稼働すればその割合は九八％。核兵器製造にはプルトニウム239が九〇％以上含まれたプルトニウムが必要なのです。

もう一つは国際社会の監視の目です。現在日本は約四十八トンものプルトニウムを保有しています。しかし、敗戦国日本は使用目的のないプルトニウムを持つことを許されていません。高速増殖炉を要とする核燃サイクル

ルでプルトニウムを使用するという形をとって本音を隠しているのです。

戦争と原発を止めよう

原発はもともと核兵器開発のために作られたものです。安倍の戦争政策とつながっています。私たちと私たちの子孫が生き残る道は、安倍政権の戦争政策に立ち向かい、戦争協力を拒否し、全原発を廃炉にするしかありません。ファイト！



アート・アド分会 N

組織を強化拡大し、階級的労働運動の発展をめざそう！